L2J

冬期講習

解答

Ｚ会東大進学教室

高２東大国語

1章

【問題】（演習）

出典…河合準雄『人間科学の可能性』／九州大学　教育・法・経済学部　99年・改題

文章略解

現象を、それを構成する要素に分割し、それぞれの要素の運動法則を捉えることによってもとの現象を説明しようとする自然科学は、めざましい成果によって人々の現実認識を変えたばかりでなく、その論理実証性という普遍性の高い方法論が他の分野の研究のモデルともなった。しかし全体的存在としての人間の研究に際しては、自然科学的な態度や方法が必ずしも有効であるとは限らない。むしろ研究者自身も一個の全体的人間として対象と接するほうが良い結果をもたらすことも多い。

解答

問1　対象を要素の集合体と捉え、主観を排して各要素の運動を観察することから導き出された、実証可能で普遍性の高い法則による世界の解釈。〔63字・解答例〕

問2　宗教における正邪の判断は、特定の教義を信ずる信者の信仰心に依存するものであり、教義の違う他の宗教の信者がそれを共有しているわけではないから。〔70字・解答例〕

問3　総体として存在する人間自体の研究に際しては、対象を要素に分解して要素ごとの運動法則を捉えようという姿勢よりも、自らも主観を持った全体的人間として対象と相対する姿勢のほうが有効だから。〔91字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…中村雄二郎『臨床の知とは何か』／オリジナル問題

文章略解

シデナムは医学の指針を経験に求めた反面、イギリスの経験論の影響を受けて理論の組織化を図ったため、〈近代のヒポクラテス〉と言われる。永い間、医学では見ることと知ることとが均衡状態にあった。ところが、医学的経験が一つの体系に組織された際、観察の代わりに哲学が導入され、盲目の知と呼ばれる状況が生じた。その結果さまざまな学派が四分五裂したが、臨床医学だけは体系を否認し、経験によって自己の真理を積み重ねていった。

解答

問1　シデナムは臨床観察による正確な記録を残した点でヒポクラテスに通じるが、近代的な理論の組織化の傾向もあったから。〔55字・解答例〕

問2　病理学として論文に書かれ体系化され一つの知となり、医学は見ることと知ることとの平衡を失い堕落したということ。〔55字・解答例〕

問3　字義のとおりに、自分の目での臨床観察に基づくことのない、観念的な、理論上の知識体系のレベルだということ。〔52字・解答例〕

問4　病理学とは別の、自己の臨床観察の体験から得られた真理を積み重ねてきた伝統ということ。〔42字・解答例〕

問5　a＝否応　b＝両義　c＝放棄　d＝保証

解説

問1　冒頭の一文に「〈近代のヒポクラテス〉」という語が出てくる。「シデナムはしばしば〈近代のヒポクラテス〉とか〈イギリスのヒポクラテス〉とか、言われてきた。だが、医学的臨床の観点から見るとき、いったいどこまで、彼をヒポクラテスになぞらえることができるだろうか。」――これは問いであり、それに対する考察が、続く第二段落第三段落で展開される。第二段落は、「このような症状の正確な記述こそ、シデナムがヒポクラテスになぞらえられる所以であろう。」と締めくくられるとおり、「ヒポクラテス」との共通点について。第三段落は、「彼がヒポクラテスとちがっていたのは」から始まるとおりに相違点について。この両段落を、第四段落冒頭「このように」という指示語で受けて、「たしかにシデナムの臨床医学は、いろいろな点でヒポクラテスのそれに近いものをもっていたが（⇧第二段落）、彼もやはり〈時代の子〉として、近代的・イギリス経験論的に理論の組織化の方向を歩んでいた。（⇧第三段落）」と続ける。更にこれを「その点で」で受け、「彼はまさしく、〈近代の〉ヒポクラテスであり、〈イギリスの〉ヒポクラテスであったのである。」と結論づける。第四段落は、まさしく第一段落の問いに対する解答を述べるものとなっている。

以上の構成を踏まえた上で、傍線部の「〈近代の〉」の部分はヒポクラテスとの相違点を、「ヒポクラテスであり」の部分は共通点を簡潔にまとめればよい。

問2　この傍線部のある同じ第六段落で「すべての空しい信念や、あらゆる体系が現われる以前に、医学は全体として、苦痛とこれを和らげるものとの間の直接的な関係のうちに存在していた。」「一つの知になる以前に、臨床医学は、人類の自己自身に対する普遍的な関係であった。これは医学にとって絶対的な幸福の時代である。」とある。これらの記述と傍線部とを結び付けると、左のようになる。

〔幸福〕医学は全体として、苦痛とこれを和らげるものとの間の直接的な関係のうちに存在していた。
臨床医学は、人類の自己自身に対する普遍的な関係であった。
⇦
〔失墜〕文字と秘密がつくり出される

すべての空しい信念や、あらゆる体系が現われる
一つの知になる

このことは、続く第七段落冒頭「いいかえれば」によって、繰り返される。即ち、「永い間、医学的経験は、開かれたままであり、見ることと知ることの間にある平衡を見出していた。それが誤謬からその経験を守ったのだ。」が、〔幸福〕の時代である。一方第八段落「だが」から話は〔失墜〕へと転じられる。「だがそのとき、この経験を一つの体系に組織化し、学習を〈容易にし〉、〈要約し〉たのであるから、医学的経験のうちに一つの新しい次元が導入されたことになる。つまり、まなざしを欠く知なので、文字どおり盲目の知といえる次元である。《「ヒポクラテスが医療を体系に還元してしまったあとは、観察が放棄され、哲学がそこに導入された」》と言われる所以である。その結果、さまざまな体系をもった学派が現われて四分五裂した」これが、〔失墜〕である。以上を第六段落同様にまとめると次のようになろう。

〔幸福〕医学的経験は、開かれたままであり、見ることと知ることの間にある平衡を見出していた
→
観察
⇦
〔失墜〕全面的な意識化
←
経験を一つの体系に組織化
一つの新しい次元が導入された……まなざしを欠く知……文字どおり盲目の知といえる次元である
哲学
←
さまざまな体系をもった学派が現われて四分五裂した

また、第九段落の「臨床医学」対「病理学」や、**問1**でみた「ヒポクラテス」対「近代」の対立関係を、この「幸福」対「失墜」に重ねてみて参考にしてもいいだろう。右に見たようなことから、「失墜」の項をみて「文字と秘密」を考えることになる。「文字」とは言語化であり、主に書物により机上で論理的観念的に考察する研究方法と結びつく。「秘密」はそこから見出される、組織化された体系等をさす。「見ること」が失われ、「知ること」だけに偏向してしまったということだ。

問3　解答の根拠となる文章構成は、**問2**で見たとおり。直前の「まなざしを欠く知」や、後の「観察が放棄され、哲学がそこに導入された」を中心に考える。医者が自らの目で患者の症状等を臨床観察することを欠いた、理論的な考察だけの次元、ということだ。

問4　第九段落の文章構成を見てみよう。

「さまざまな体系をもった学派が現われて四分五裂したが、その背後に、臨床医学だけは無傷で生命を保っていた。」

⇦

Yさまざまな体系をもった学派→四分五裂

↔

X臨床医学　　→無傷で生命を保っていた

「それは、したたかに、体系を否認する経験によって自己の真理を積み重ねていった」

⇦

Y　　体系

↔

Xそれ（＝臨床医学）→経験によって自己の真理を積み重ねていった

「このようにして一つの肥沃な連続性がつくり出された。この連続性こそが、病理学に対して、相異なる世紀にわたってのこの学

問の同一性を保証したのである。」

⇧

Y病理学

↔

Xこの学問（＝臨床医学）→このようにして（＝経験によって自己の真理を積み重ねていった）一つの肥沃な連続性

がつくり出された。この連続性……相異なる世紀にわたってのこの学問の同一性

以上の三つの図式を重ね合わせて、XYの対立の構図からXの要素として傍線部を考えてほしい。具体的には、直前の「このようにして」という指示語の受ける内容が第一に重視される。

2章

【添削課題】

出典…竹内啓『近代合理主義の光と影』／東京大学　81年

文章略解

日常的合理性を支える基礎の一つはバランス感覚である。最近、生活の変化の加速化と情報の過剰な氾濫により心理的な対応が不可能になり、「遠近法」についての感覚も混乱している。遠ざかるにつれての関心の減少は、適当なものでなければならない。また、遠近法はその視点が動きうることも前提としている。「近代科学」は、無限遠点に視点を置いて完全な普遍性を達成しようとしたが、各分野に空虚な「一般理論」の失敗の例は多い。

解答

問1　過剰な情報の受容によって、それらと自己との関係の深浅が把握できなくなり、自己の視点から捉えた世界像に対する信頼が揺らいでしまうということ。〔69字・解答例〕

問2　自己と深く関わる事柄であるほど強い関心を持つが、同時に関係の薄い事柄についても無関心にはならず、自己中心的な独善に陥らないようにするということ。〔72字・解答例〕

問3　近代科学の普遍性への希求に反し、個々の立場や視点の置き方の違いによって、世界に対する理解には差異が生じるものであるということ。〔63字・解答例〕

特別問題

文章略解参照〔200字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…栗原彬『管理社会と民衆理性』／東京大学　87年

文章略解

世界との無垢な交通を行う息子。その世界は、私達には失われているし、息子もまた大人になる時に失う。そのことの自覚が痛かった。私達は、世界とのこうした交通を、学問や芸術といった迂回路を通じてしか回復できない。が、このような活動は「学問」や「芸術」とは呼べない。「個性」や「知識」といった価値基準に囚われる「芸術家」や「学者」を置き去りにして、普通の人々の間から、共同的な交信回復の営みが生まれつつある。

解答

問1　息子が、幼児期特有の、ひたむきで無垢な、世界との共同的な交信を行なっている、ということ。〔44字・解答例〕

問2　世界との共同的な交信回復は学問や芸術によるしかないが、それはもはや、学問や芸術とは呼べないから。〔48字・解答例〕

問3　専門家以外の生活者が、従来の価値基準に囚われぬ、自分と世界共々の甦りを実現しつつある、ということ。〔49字・解答例〕

解説

問1　傍線部**ア**を含む第一、第二段落は、記憶の中の一場面を、例として読者に提示している部分である。その例に対する説明が、第三段落でなされている。

冒頭の「子どもの所作に触発された私たちの思いは平静ではあり得なかった。」の「子どもの所作」が、傍線部**ア**を受ける。それによって「私たちの思いは平静ではあり得なかった」のはなぜか。これを説明するために、まず「子どもの所作」の意味するところを述べていくのが、これに続く部分である。すなわち「一瞬、光の乱舞に包まれて、無心にさし出された手は、世界とのひた

むきな無垢の交通を告げていた。世界は、この子にとっては生きているが、私たちにとっては失われている。この子が大人になるときに、この子もまたそれを失うはずだ。」という箇所である。そして、「そのことの自覚が、私たちには痛かった。」と、「私たちの思いは平静ではあり得なかった」ことの理由に結び付けている。

さらに、この「世界とのひたむきな無垢の交通」が本文17行目「そのような世界との交通」、21行目「幼児期の根源的共同性」、文章末尾傍線部**ウ**の中の「共同的な交信」などと受け継がれていく点にも着目していく。

問2　傍線部**イ**の直前の「だが」という接続語から出発する。「だが」の前に「一つめの屈折」が述べられていて、それを受けての傍線部**イ**「もう一つ」の「屈折」という訳である。

まず「一つめの屈折」についてだが、これは、**問1**の説明で挙げた箇所の直後、「そして」から始まる。つまり「私たちが期せずして一致した思いは、そのような世界との交通を、何と遠まわりしてでなければ回復できないところにまで私たちは来ていることか、ということであった。自分と世界ともどもの甦りの迂回路に、妻は舞踏表現を思い浮かべ、私はそこに社会科学の営みを考えていたのだ。」という部分である。これを受けての「もう一つ」の「屈折」は、傍線部**イ**直後から説明される。「ニーチェのメタファーを借りれば、駱駝、獅子を経ての小児への人生の回帰、あるいはワロン流にいうなら幼児期の根元的共同性への回路に、私たちが見出そうとしている活動は、もはや『芸術』と『学問』の名において呼ぶことができない類のものである。もしそれを『芸術』『学問』というとしたら、それは過渡的で便宜的な文化的惰性態にすぎない。ましてこの回路に立つ者を、『芸術家』と『学者』という種族に限定することはできないだろう。」という部分である。

問3　まず「普通の人々の間から……」云々という、傍線部**ウ**前半を考える。これは、直前に「……『芸術家』と『学者』を後方に残して」とあるように、「芸術家」や「学者」との対比で考える。その際、第四段落で、**問2**の解説で挙げた部分の直後に「『芸術家』と『学者』のイメージには、芸術院やアカデミズムに親しい意味論の世界がまつわりついていて、普通の生活者の間に現在生れつつあるものを捉えきれない。」と書いてある部分に注目する。「普通の人々」とは、こうした「普通の生活者」のことだ。その後に、「芸術家」や「学者」の専門家としてのあり方の実態が述べられている。

続いて、「新たな感性と理性の錬磨」の部分だが、これは、第五段落冒頭の一文「ところが今日明らかになりつつあることは、

『芸術家』や『学者』がひそかに依拠し、そこから密輸入してきた普通の人々の価値基準の方が変わってしまい、『芸術』も『学問』もかつてそうであったようには自明的に成り立たなくなった、ということである。」から考える。「かつて」の「価値基準」とは違うもの、ということだが、この「かつて」の「価値基準」とはどういうものか。その後に「いつまでも『個性』と『知識』の名において特権を固守しようとし、『美の追求』と『真実の追求』の幻影にしがみついている『芸術家』と『学者』……」と書いてある箇所に基づいて考える。

最後に「共同的な交信回復の営み……」だが、これは、第三段落末尾の文冒頭の「自分と世界ともどもの甦りの迂回路」であり、第四段落冒頭の「ニーチェのメタファーを借りれば、駱駝、獅子を経ての小児への人生の回帰、あるいはワロン流にいうなら幼児期の根元的共同性への回路」のことである。

●メモ●